

中谷宇吉郎 雪の科学館 通信特別号

NAKAYA UKICHIRO
MUSEUM OF
SNOW AND ICE

〔講演録 ほか〕

2006(平成18). 3.31

発行/中谷宇吉郎 雪の科学館
〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地
TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088
URL▶ <http://www.city.kaga.ishikawa.jp/yuki/>
E-mail▶ yuki-mus@blue.hokuriku.ne.jp



▲片山津のテリーナホールに160人が集まった



▲講演する中谷健太郎氏

講演録 「私の宇吉郎」(シリーズ第7回)(2005.7.2)
「地域ブランドと地域ブレンド」
由布院温泉亀の井別荘主人 中谷健太郎

▼亀の井別荘の庭



▲片山津コーラスの合唱で開会

2~7ページ



至福のひきこもり
椎名 誠

8ページ



▲空から見た由布院盆地。NHK「風のハルカ」の舞台にもなった

「地域ブランドと地域ブレンド」

中谷健太郎

こんにちは。「地域ブランドと地域ブレンド」というのがテーマです。「地域ブランド」とは何か？地域固有の文化・経済のイメージです。その地域ブランドが大事である、地域固有の個性を育てていかないと、地域がもたないという考えです。一方で「地域ブレンド」という言葉があります。私が考え出したのです（笑）。「地域ブランド」とは外とのやりとりで醸された、つまり「ブレンドされた地域像」ではないか、というのが私の仮説です。地域固有の文化といっているけれども、実はいろいろなものが地域に入ってきて、長い間に、地域固有のものに変化していったのではないか。

宇吉郎をめぐる三つの話

今日は「私の宇吉郎シリーズ」です。で、宇吉郎伯父との関係に話を結んでゆこうと思います。私は宇吉郎の妹・武子の子供で、甥の健太郎です。八十二〜三年前に祖父にあたる巳次郎が、この地・片山津から由布院に出奔しまして、私の両親をこちらから呼んで、由布院・中谷家を拓きました。そのわが家を、宇吉郎はしばしば訪れております。詳しくお知

りになりたい方は、昭和十三年に出た『冬の華』という宇吉郎伯父の最初のエッセイ集に「由布院行」という一文がありますので、お読みください。そこに私の祖父であり、宇吉郎にとっては伯父に当たるふしぎな巳次郎が登場します。

その後、宇吉郎伯父は、弟の治宇二郎がフランスで病を得て、由布院で療養することになったので、しばしば由布院を訪れています。その治宇二郎の長女である法安桂子さんが広島からこの会場にいらしていますが、そうやって中谷家は北陸から離れて、いろんな土地に散ってゆきました。この辺りからブレンドの話が句ってきます。宇吉郎伯父は北海道から東京を中心に、巳次郎は別府から由布院へ。その巳次郎の末弟・直吉の家系が同じ由布院で旅館「玉の湯」を拓き、療養していた治宇二郎の次女・山下恭子も由布院に住んでおります。むろんこの地・片山津には中谷宇平様ご二統や多くの親戚、ご縁の方が居られ、宇吉郎の家系はアメリカと東京に分かれ住み、今日は東京から次女の美二子が、この会場に参っております。そして、私は由布院で旅館・亀の井別荘を経営しております。こうして今日、あちこちから中谷の家

系が集まりました、皆さんに迎えられ、大きなエネルギーのうねりを生じています。ここに人間のブレンド力を私は感じておるのです。ブレンド力は人とモノと一緒に移動します。亀の井別荘の敷地の中に「雪安居」（せつあんこ）という建物があります。原宿の住居を三分の一、移築したものです。安居というのは雨安居などに用いる仏教の言葉だそう、で、「ゆっくりお籠り」の意味を含んでおります。それで勝手に「雪安居」と名付けました。原宿の家の一部がこの世から消えないで由布院に移って、そこに息づいている。おかげで私はいながらにして宇吉郎伯父ゆかりの人たちを迎え、静子伯母の晩年を親しくごいっしょできたのです。今も宇吉郎ご縁の庵ということ、で、研修会や懇親会に、いろんな方が集まってこられて、新しいエネルギーがブレンドされ続けています。

さて、ブレンドについてのイメージ予告を終わりました、今度は私の側から見た宇吉郎伯父の話になります。まともな三つの事柄をお伝えしたいと思います。一つは私の大学入学に関する事です。その頃、由布院の農業高校で山羊を飼っていた私のもとへ、ある日突然、宇吉郎伯父から手紙が来まして「東京の大学に来ないか」というのです。仰天しました。「大学は大して役には立たんけど、邪魔にはならん。役に立たんことを知っておくのもいい。東京もわずらわしい所だけ

れど、京の昼寝ということもある」。慌てて話を確かめに上京した私に、伯父はそのような話をしてくれました。「それに武子が喜ぶだろう」。その一言が重く聞こえて私は肚を決め、東京の大学に出たのです。

「しばらく原宿の家が空っぽになるから、お前はそこにおればいい。一家でアメリカの大学に研究招聘されたので、それをきっかけにしろ」。そのとき学資の援助もいただきました。必要な額の半分くらいで、あとの半分は自分で働け。それでもう一軒の在京の親戚である安全石油の奥村さんを頼って、ガソリンスタンドの油ボーイをさせてもらいました。そのとき宇吉郎伯父から提示されたオカネの受け取り方法が見事だったのです。アメリカから伯父の手紙が届く。それを持って三菱銀行の渋谷支店を訪れる。そうすると支店長が一定のオカネを出してくれる、という方法です。厄介です。手紙を持って、必ず銀行を訪ね、支店長と面談しなければならぬ。受取りの返事に併せて、東京に残っておられる静子伯母の母上や周辺の様子も、アメリカに知らせるようになります。むろん由布院の状況もです。

「世界に出る、ということとは自分が何者であるかをはっきり示すことだ」とアメリカに発つ前に伯父は言いました。「私の手紙を持ってゆけば、健太郎が何者であるかがわかる、そこから世の中が始ま

るんだ」。銀行から自動的に一定額の小切手が届く方法に比べて、なんとも智恵と温かみに満ちたやり方であったと、時間が経つに連れて、驚きがふくらんできます。また、今日の話に引き付けて言えば、人やモノに続いて、情報もまた状況をブレンドする力を持っている、ということですね。交流・交換・通信が「ブレンド力」の正体です。そしてその中心において、核であり続けることが「ブランド」を生むのです。ブランド力は持つて生まれた個性ではなくて、核に向かつて集まっていく人やモノや情報を繋ぎとめる力です。それらを受け止め、中核であり続ける覚悟は「自分はどういうものか」、あるいは「こういうものでありたい」、また「ここはこういう町だ」「こういう町でありたい」という意思を示し続けることです。そのことを宇吉郎伯父の手紙から学びました。

二番目はそれからしばらく経って、宇吉郎一家がアメリカから原宿に帰ってからの暮らしぶりです。家族が帰ってきました。家族が原宿に住んでいるから私が留守番する必要はなくなりましたが、犬の散歩をさせなきゃならないとか、いろんな理由を言いついて、私はそのまま庭の片隅の三畳くらいに家に居座りました。時々ご飯もごちそうになる横着な居候でした。ある時、岩波書店の当時専務だったと思うのですが、小林勇さん、大変偉い人ですけども、その方がいらして、

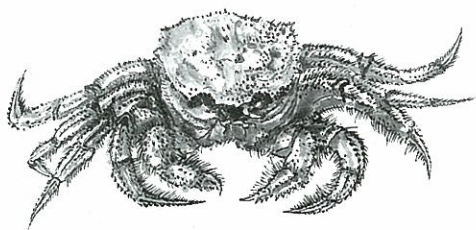
お酒になった。ご機嫌が進んで、「蟹はまだないのか」「まだないよ。冬にならないと蟹はこない」「食いたい」「食いたくてもないんだ」という話になって、「じゃあ描こうか」と。蟹を絵に描くと言うんですね。蟹はないのにどうやって描くのか、「芥子園画伝」という中国の清の時代の初歩的な教科書を引っ張り出してきて、その中の蟹の絵をみながら、小林勇さんが墨をすり、描き始めた。なんとマツチの棒で描いておられるんですね。墨をつけて。マツチを持つて強い線をしっかりと辿っておられる。僕はびっくりして、思わず「へえー。中国人はマツチ棒で描いてたんですか？」と言ったら、小林さんは苦笑しながら「バカモン、なんで中国人がマツチで描くか」。ワタシ、縮み上がりました(笑)。そしたら、宇吉郎伯父が「健太郎はお前さんがマツチ棒で描き始めたんで驚いたんだよ。健太郎は文学青年だからあんな風にしか言えないんだ。」宇吉郎伯父はゆっくりと細い筆を持ち出していました。小林さんはマツチ棒を取り上げた、小林さんは率先実行される。宇吉郎伯父は正統的な小筆をゆっくりと用意する。私は脇から「中国人はマツチで描くんですか」と言う、一見バラバラです。小林さんは「バカ」と言い、私はビビリ、宇吉郎伯父がとりなしてくれた格好だけど、「マツチ棒で描く」という面白さには、みんな気付いていた、そこが面白い。表現とい

うものは一枚岩じゃないということを学びました。共通項はある、だけど表現の仕方が違っている。そこにブレンドされる様々な力とブランドという一枚岩の力が見えてきます。各々の表現は大事だけれども、表現の底に共通して流れている価値観を手探っていくことも大事です。真っ向から対立している人たちが、底辺でつながっていることを見つけ出す、そこに新しい共生の可能性を見たい、この頃そう思います。

今度の市町村合併に私は反対しました。合併しちゃういけない、生活領域の特性が壊れる。顔見知り社会がバラバラになって、広い地域に溶け出してしまふ。だから反対。そうやって運動をやっているう

飛星 過水白

宇吉郎伯父



毛がに。宇吉郎晩年の墨絵の一つ

ちに、いつのまにか共通する価値を提示する視点を忘れてしまいました。みんなそうなったから收拾がつかない。「町長リコール！」に突っ込んでゆく。気がついたら若い人たちに背中を押されて、いつの間にかモタモタと先頭にいらして(笑)、ああなると逃げられないですね(笑)。そのとき僕は六〇年安保を思い出していました。わっせわっせと国会議事堂に行つて、気がついたら「若い人は前へ」。僕はあの頃若かつたんです(笑)。あそこでは若い人が前へ押し出されるんです。後ろからわっせわっせと押されて、どんどん前へ出まして、頭を叩かれて帰ってきました(笑)。今度のリコール運動では動きが逆で、年寄りが前に押しだされて背中を押される(笑)。勝つても負けても、人間関係はもうメチャクチャです。若い者に責任を持たせたら、若い者はこれから社会の表に立っていかなきゃならないの大変です。こつちが逃げたら若い者が小突かれるわけですから逃げられない、可哀そうですね。で、リコールには勝つたけれど、その後の町長選では惨敗して、それで合併が進んでしまいました。残念です。責任も感じています。だけど希望も湧いてきた。一見違うようにみえる表現の背景に案外共通する感動が潜んでいる。それがつながってくる可能性が強い、その可能性を信じたい。そう思います。それが希望になりました。そこに新しい地域ブランドの地

平を見たいと思います。

三番目に、これはそれからちよつと経つてからですが、私は宇吉郎伯父に保証人になってもらって、東宝撮影所に入つたんですけれども、ある日母親が夜行列車に乗って上京してきまして、「帰ってほしい」と言うんです。父親が死んで、母親は「もうやっていけない」と。包丁を使いすぎで、神経痛で手が動かないというんです。東京駅のプラットホームに降りた時、老眼鏡をポロツと落として、それを拾えなかった。老眼鏡を拾えない母親を見て、これはいけないと思ひましたね。帰ってゆく母を見送つた午後、保証人である宇吉郎伯父を原宿に訪ねました。撮影所を辞めて由布院に帰るべきかどうか。癌を病んで臥せていた伯父は、寝床の上で起き上がって、即言いました。「由布院に帰りなさい」。それからゆつくり話してくれました。「人と会うことが何よりも大事。東京よりも由布院の方がそれができる」「えっ？ 人口一万二千人の由布院で？」「ああ、由布院は人が憩いにくる所。だからゆつくりと人と出会える。東京では人は用件を持って出会う。だから人と人の出会いが難しい。人との出会いの積み重ねが生きていることの中身だから、即、由布院に帰る方がいい」。そして最後に付け加えたのが「それに武子が喜ぶ」。私は納得させられて、東京を引き上げ、由布院に帰つたのです。「人との出会いの積み重ねが生きていることの中

身」という宇吉郎伯父の言葉がほんとうにわかつたのは、宿屋をやり始めて二〇年も経つてからのことでした。この頃、その思いはますます深まっています。年とともに…。

ところで帰つたら、母親がやたら元氣なんですすよねえ（笑）。手が動かないと言っていたのに、あれは嘘だった（笑）。プラットホームで老眼鏡を落としたりして、顔をしかめながら拾っていたのは芝居だったんですね（笑）。私は助監督をやっていたけど、あんな上手い芝居は…（笑）。それから、母子でガンガンと始めました。私の名前で銀行からお金を借りて、気がついたら私に全責任がかぶつてきていました（笑）。

ところで宇吉郎伯父から言われたように、わが家にはいろんな方がやって来られます。来られなかつたら大変ですが、来られるのも大変です。考えてみると、大人になるまで、自分の家にお客様をお迎えするという体験は、そう多くはなかつたのです。しかも一時間や二時間じゃない。ほぼ二〇時間、あるいは二泊三泊、その人と向き合つてどうするか、ガードを固めても得るところがない。「おっしゃる通り」では身がもたない。とうとう居直つたのが「ブランド」です。お客様を「ブランド」申し上げる。お力をいただいで、我が家をコクのある豊かな宿に育ててゆく。但し「わが家が、わが家であり続けること」そこは譲れない。



由布院に戻ってまだ若い頃の中谷（右から2人目）。ムラ人たちといっしょに

それを欠かすと、わが家の方が「ブランド」されて「溶解」します。わが家がお

客様をブランド申し上げることによって、わが家の「ブランド」が魅力を増し、お客様の期待にお応えすることができるようです。「人様との出会いが大事」と言つた伯父の言葉を噛みしめながら、私の思いは「地域づくり」に向かいました。宿の魅力は滞在の魅力。滞在の魅力は地域の魅力。そして地域の魅力は「地域のブランド」であります。「地域ブランド」は「地域の個性」であり、「風格」であります。金沢の山出市長は「それは歴史だ」とおっしゃった。由布院の場合は「風景」だと、私は思います。「命の風が吹く景色」です。「食材の景色」でもあります。由布院は「食のみえる風景」を保

ちながら、「風景のみえる食」を提供し続ける村でありたい。そこに温泉が湧き、人々は食後の時間を悠々と過ごす。それが村の希いです。しかし、その希いほどれども実現していません。農業生産は十三億に止まり、一七〇億に膨張した観光生産額は、自動車観光の混雑と大型資本の洪水を呼び込んでいます。そして自主財源比率五〇％に近い、他町が羨む町役場はサツサと三〇％を割る近隣町村と合併して、オクニからの特例債に尾っぽを振っています。もう湯布院という自治体はなくなつてしまつた。それでも湯布院は自立しなければなりません。みんなを脚を投げ出してオクニに頼っていたらオクニは七百兆円の借金と共に倒れてしまふからです。

自立するにはどうするか？ オクニにばかり頼るのではなく、ご縁の方々のお力を迎え入れて、それを町の力にしてゆくのです。ご縁の方々のお力を迎え入れて、町の釜の中で錬金してしまふ力を「ブランド力」、そうやって金になつた土地の魅力を「ブランド力」と呼ぶことにします。「ブランド力」を「ブランド力」に錬金することによって、地域は自立できる。自力とは「ブランド力」と「ブランド力」を足したものです。決して自前の力だけをいうのではありません。宇吉郎伯父が最初に言つたように「手紙を持っていつて支店長に会つて、私はこういふものだ、と世の中に示す」といふ話

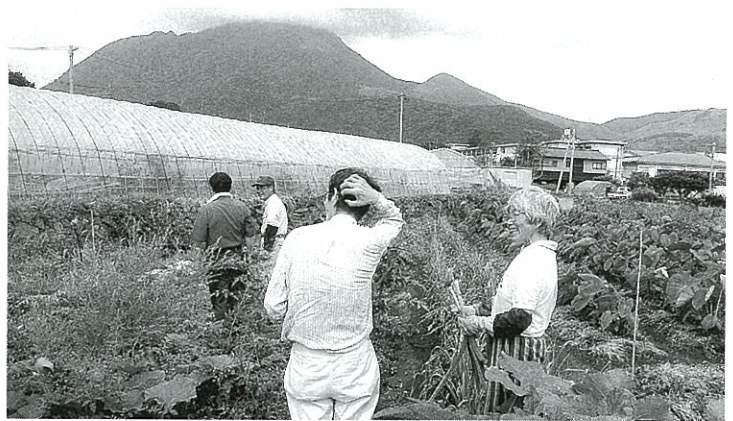
宇吉郎伯父が言った「出会いが大事」という言葉から歩き始めて「受入」「誘力」「地域ブランド」「地域ブランド」を辿り、とうとう「つくり」の話までやってきました。難しい話ではありません。現実には難しい。けれどやれる範囲の話です。だから一緒にやりましょう。お楽しみはこれからです。

安心の喜び

由布院の「ブランド力」の中身は何か。それは「安心の喜び」です。「喜び」にもいろいろの種類がある。「人を打ち負かす喜び」「スリルに身を任せる喜び」…そういったものではなく「安心する喜び」が由布院の土地柄であり、即ち、地域の「ブランド力」であります。「安心の喜び」を何でもって提供するか。一つは、山・川・田畑の風景とそこから採れる食材です。NHKが「風のハルカ」という番組を十月から六ヶ月間全国放送することになっておりますが、その舞台は大阪と由布院で、メイン・テーマは「幸せの食卓」です。田畑からまっすぐに健康な食材を、厨房でなく「食卓」まで持ち込むのです。そこで農家と料理人と接待人と客人が出会う。そこが「安心な食卓」になるというわけです。そのようなコンセプトをNHKが全国に発信してくれているのですが、それだけなら、単なるPRですが、それを「ココ」に運び込

む力、受け入れる力をブランド力と言います。ブランド力があれば、いろんな力が町に流れ込んで町の「魅力」になります。それが町の「ブランド力」です。だから、「農業がすばらしい」んですよね。そしてもう一つは、保養・温泉地として由布院が三十八年前に誘致した厚生年金病院のリハビリテーションホスピタル。心臓循環系が主ですから、ゆっくり由布院で保養しなさいと。病院のほかにも保養ホームがあるし、最近流行の「ゆっくり保養・滞在型・観光」で、根っこはずっと昔の大正十三年にまとめられた「由布院温泉発展策」です。そこにドイツを見習って、村を保養温泉にせよと書いてある。それを育てようとするれば、作業は全部農業とつながってきます。安心な食べ物一つでも農業と繋がらなければ、手に入らない。山のお守りも農家が本気でやらないと、観光業者が代わってやってできません。

だけど、私たちはそれをやってこなかった。農家は放っておかれたのです。由布院を「良い所だなあ」と言ってくれる人たちだけを相手にして、年間一八〇億の売り上げをあげてきました。だけど、農家も、それから地元の商店街も、ほとんど観光経済システムから洩れ落ちていきます。システムがないから、受け入れる側が参加できない。一方、入ってくる方は野放図です。どんどん入ってきて、農地を買い取り、商店街を埋めてゆく。ウ



農家の方と

チの近くは三年間で二百軒店が増えまします。それを「発展」と言う人もいます。いますけれども地元の商店街は衰退してゆきます。新しい観光商店はスピーカーで「ニャーニャー」と猫の鳴き声を道に流す「ネコのお店」(笑)。二、三軒向こうに今度は犬屋が出てきました。「ワンワンワン」(笑)。それが好きだ、という不思議なお客様も群がっておられます。「由布院名物トルコのコーヒー」。トルコなのか由布院なのかわからない(笑)。つまり農業と根が結ばって、農村として充実してゆくはずの町の経済が、産業ごとにバラバラで知らん顔してきた。観光

は観光、農業も商業もそれぞれ勝手に。例えば「牛喰い絶叫大会」なんか、今年で三〇回ですよ。牛一頭牧場運動で牛も増やして、その畜主を年に一回、原っぱに招んで、飼育した牛を食って絶叫する。そうやって都市の畜主を繋ぎ、由布院牛の評判を支え、原っぱの自然を開発から守る。そのために十七年間頑張った牧場運動は孤立して、消えました。残ったのは絶叫大会だけです。それもなぜか観光の祭りということで、町を挙げての催しにはなかなかならない。今年もNHKの全国ドラマ「風のハルカ」のロケに取り上げられたから、町も力を入れてくれましたけどね。来年は湯布院町もなくなつて、由布市になりますしね…、まあ自力でやり続けるほかはないでしょう。一見バラバラに見えても、蟹の絵をマツチで描く小林勇さんと、細筆で書く宇吉郎伯父のように、各々が自在に行動すべきなんです。但し共有できる価値の上に立って…。蟹そのものから吹っ切れてしまつたら各人の行為は意味を失う。共有の価値を確かめ合う努力を行わなかった報いが、今度の市町村合併での惨敗です。台風がその年に十回来たんです。農家はもう全滅に近い。あとは、災害復旧の河川工事に出て労働賃金を貰うくらいでしょう。農業のダメージを公共工事でカバーするためにも、荒れてしまった田圃の土砂を除くためにも、「公の補助金」が必要です。田圃のためだから、お

国の言うことを何でも聞きます。合併でも何でも、とにかく補助金をもらっておくれ、という状況であります。そのことに關して、僕らが何か出来たか…、何も出来ないんですね。僕らはそこで野菜が穫れないければ、よそから仕入れて使うだけ。お金ではもちろん支えることはできません。お金では支えられませんが、何かの形で一緒に村で生きる仕組みを作れなかったのか。僕らが一番大事に考えている自然の、癒しの素であるものを支えている農家との精神的なつながりを、具体的に結ぶことができなかったのか。台風の後も、慌てて板場たちが飛んで、テントを張るのをひっぱったりするのが精一杯でした。村を共有する仕組みを育ててこなかった報いです。そういう努力を今、始めようとしているのが、私たちの町づくり状況です。

由布山荘の話

その運動の拠点に考えているのが、元町営の国民宿舎「由布山荘」です。町営であった国民宿舎を、町が民間に放出しました。政府が進める「指定管理者制度」に乗ったのです。それはいいけど、民間がやると、他の民間を圧迫します。つまり商売仇です。それを役場は、地元の世界に何の相談もしないで、いきなり全国に向けてホームページで募集してしまつた。びっくり仰天でしたよ。とにかくな

んとか話をつけて、観光協会と旅館組合で運営を引き受けたのですが、これが大変です。黒字を出せば同業者を圧迫するし、赤字だと自分たちが倒産する。「経営」ではなく「運営」する、とはそういうことです。

ここで「蟹」を見つけなくちゃ。マッチで画いても、筆で画いても蟹は蟹。観光でも農業でも加工業でも、地域は地域。そんな具合に進めるにはどうすればいいか。「食卓文化会議」というものを考えられています。「食卓」とは「農業」と「商業」と「観光」が出会う所です。食卓で農業と料理人と売人が出会う。そして何よりも「客人」が出会う。そんな実験の場所として「由布山荘」を運営しよう、というのです。まだ言い出しつぺの口ばかり状態ですけど、取りあえず「蟹」は見つかった、というところですよ。あとは由布山荘を「ココ」にして各々が筆やマッチや鉛筆を持ち寄って「ココ」で蟹を画くのです。「ココ」で地域文化と「地域産業」の個性的な絵を画き、育ててゆく。合併して膨らんでゆくような行政に頼ってはおられないと、まあそんなところですよ。

交流文化産業

三番目に宇吉郎伯父が言った「人との出会いが人生の大事」という話は、まとめて言うと、これこそ交流文化なんです

ね。JTBが今年、交流文化産業と名乗り始めていますから、これは大きな視点の転換ですね。十年位前にJTBは「時速四キロのまちづくり」ということを言いました。非常に耳新しかったですね。それまでは、観光客を右にやったり左にやったりする、つまり人を動かしたほうが儲かった。それを一番やってた張本人のJTBが「時速四キロのまちづくり」を言い出したのです。時速四キロとは何か、人が歩くということですよ。歩くスピードです。人が歩くような町を造らないと、観光客は行かない。行かなければJTBも潰れる。今まで町から町へ次々にすばやく乗り継いで行こうと言っていたのに一八〇度の転換ですね。今度それをさらに踏み込んだのが「交流文化産業」です。

JTBがそこまで踏み込んで展開しようとしているのに、肝心の「地域」が巧く受け入れられないのです。地域全体で多様な受け入れ体制が構築できない。「地元」「同業」「他所者」などの「仲間主義」をまだ越えていないのです。地域は滞在・散策の客人を受け入れることで、人口を増やせます。ムリに市町村合併なんかしなくてもね…。

わが家は今、旅館が九〇%弱ぐらいの利用率でまわってますけれども、その中の約七〇%近くがリピーターです。その中の約二五%近くが滞在なさる。滞在ということはどういうことかという、「町に出かける」ということです。滞在なさ

る方は旅の日々を豊かにするために、町に出るんです。町の人々がそれに応える形で誘導すれば、滞在客は限りなく定住民に近づいてゆく。一緒に生きてゆけるギリギリの町の形を、自信を持って提示すれば、そこが外の人と文化を迎え入れる、ブランドの「ココ」になります。

他所から飛んできた種だつて落ちたら土の中にもぐって、その周辺の土や水や多くの影響を受けながら、根を出して花を咲かす。その花が生き続け、生え替わり続いてゆけば、その花は「ココ」の花になります。もちろん葛藤はあります。入ってくるモノの遺伝子と、地場の条件がきしみ、醗酵する、それが町づくりのエネルギーです。その葛藤・取り組みを逃げたら、単なる「侵略ごっこ」にしかならない。人と出会うことの大事さや「一つの夢をいろんな手法で共有できる」という考え方、そして「わたしはこういうものだ」ということを、しっかりと世の中に提示することが、すべての幹になっていると、今、改めて感じている次第です。

ありがとうございました。

風まかせ 赤マント

726

至福のひきこもり



椎名 誠

イラストレーション 沢野ひとし

暮れにバカ友人たちと雪中貧乏合宿をして東京に帰ってきたあとはしばらく蟄居していた。この歳のおとつあんがいきなりひきこもると本格的になる。ひきこもって何をしていたかというと本を読み酒を飲み本を読み酒を読みじゃなかった酒を飲み本を読んでいた。いいなあこういう人生も。

ふだんやたらとあつちこつち動きまわっていたのでいったん家にひきこもってしまうと門から出るのも嫌になった。それどころか玄関から出るのも面倒である。
自宅の仕事場兼寝室の三階にこもり、時々屋上に行って息をすって吐き吐いてすって二階にあるリビングに行って

めしを食う日々だった。そうなるとその記録をもっと延ばしたくて宅配便などが来ても一人しかない時は居留守を使いたいほどだったがそれでは寒いなか配達してくれる人に申しわけないのでやむなく一階まではおりていくが門から外には出なかった。だからといって何も意味はないんですが。

とにかくいろんな本を読んでいた。二月にアラスカをはじめ寒い国にたてつづけに行く予定なので寒い本を集中して読むことにした。まず『中谷宇吉郎集』（岩波書店）全八巻を読みきることにした。全集が出てからずっとウエイティング状態だったのだ。

中谷宇吉郎は寺田寅彦に師事し、雪や氷についての世界的な権威となった科学者であり随筆の文章も寺田寅彦の系譜である大正デモクラシーの息吹にみちて冷静にそして暖かい視線に貫かれた上品なもの。寒い冬の日々、暖かいところで毎日この全集を読めるのは至福のきわみであった。いやはや科学随筆は面白い。

たとえば幻の水島の章がある。読んでいていわゆる「目ウロコ感」をひきしぶりに味わった。『百年前の北極は、現代でいえば「月の世界」であった』という書き出しではじまる。

内容はこんな話である。

そのむかし北極海にはしばしば新しい島の発見があった。探検家やイヌイットなどが上陸し、島の山を登り露出した土まで発見した。しかしそのことごとくがやがて行方がわからなくなり幻の島として消えていった。どれもが流水の堆積によって一時的にできた島だったのである。

この全集を読む数年前には『パーニンの北極漂流日記』『浮かぶ氷島T-3』などという翻訳本を読んでいた。直径三、四十キロ、厚さ五メートルの氷盤とよぶ、どちらも巨大流水の上は何人もの人々が気象観測などをして漂流生活をする話である。そのことをもつと知りたかったのだがなかなかその糸口すらなく「もういいや」と諦めかけていたのだが、中谷氏はなんとそこにおとずれていて、日本人の科学者の目でくわしく書いていたのであった。いやはや面白いのなんの。読んでいるあいだに東京に雪が降ってきた。でも暖かい部屋で読んでいたので「わははは」なのである。

（『週刊文春』2005年2月3日号

より転載。後半省略）